様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ２１２９７

研究課題名（和文）沖縄の軍用跡地開発と社会空間の再構築に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological Study on Former Military Site Development and Reconstruction of Social Space in Okinawa , Japan

研究代表者
越智　郁乃（OCHI, Ikuno）

立教大学・観光学部・助教

研究者番号：１０６２４２１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、現代沖縄の重層的な権力構造の基で行われる軍用跡地開発を例に、そこでの社会空間の再構築について文化人類学的に探究した。具体的には、沖縄戦と軍用地接収により強制移住を経験した住民集団が、返還後の再開発で主体的に生活空間と宗教空間を再建する過程を考察した。その結果、跡地再開発に伴い、①戦前からの聖地の復興や、過去の集落景観のアーカイブ化、②米軍政時代の記憶表象の活発化、が明らかになった。再開発によって町が賑わうという表面的な変化の中で、過去の記憶表象活動は住民にとって過去を取り戻し自己を見つめる行為であり、記憶の植え込みは社会空間を再構築するうえで重要な意味を成している。

研究成果の概要（英文）：　This study explores how social spaces can be rebuilt through the redevelopment of former American military land in modern Okinawa. The study specifically focuses on a rebuilding process of living and religious spaces of the returned former military lands, initiated by a group of residents who had experienced forced relocation due to the Battle of Okinawa and following military land confiscation.
It was revealed that through the redevelopment of the former military lands, (1) reconstruction of the old sacred places that were destroyed during the Battle, and archiving of past village landscapes were carried out; and (2) the memory representation of the US military government era was activated as well. In the superficial changes of the redeveloped busy town, the residents' memory representation activities are the acts of regaining their past and taking a good look at themselves, and "the implantation of memories" has significant meaning in the reconstruction of social space.

研究分野：文化人類学、民俗学

キーワード：沖縄　軍用跡地　再開発　記憶　アーカイブ　ツーリスト　住民コミュニティ

## １．研究開始当初の背景

沖縄県には平成 26 年現在、日本における米軍専用施設・区域の 74.3%が集中する。県の総面積の 10.2%を占める軍用地は、狭小な沖縄県の中で大規模かつ高密度に形成されている。その一方で返還された土地は、沖縄県の調べによると昭和 36 年から平成 19 年までの間で 12 万ヘクタールに上る。平成 18 年の日米安全保障協議委員会において返還方針が示された嘉手納飛行場より南の施設・区域については県の人口集中地域であり、大規模な返還になることから、計画的な都市づくりを行うことで新しい経済活動の拠点を目指す必要がある[沖縄県 2008]。

すでに返還された土地では、半数以上が公共事業か個人、企業により跡地開発が行われている。それらに対し、「沖縄の主体的な内発的発展論」を唱える経済学の観点からは、「沖縄らしい特色をもち、開発と環境の調和を考えた持続可能な発展」を行う必要が指摘される。中でも、那覇市の米軍牧港住宅地区（192 ヘクタール）の返還跡地開発で誕生した「新都心」は、那覇市の 6%にも及ぶ。大規模な都市圏返還跡地開発の先駆的な例として注目される一方で、そこでの開発は「地域振興整備公団と個人地主がリードした住民不在の商業型開発」であると批判されている[西川・松島 2010、真喜屋 2010]。しかし、開発を受け入れたかのように見える人々の主体的な日常生活の再建や、そこでの宗教的実践が今日に至るまでどのように行われてきたかは、考察の対象外であった。

報告者の知見によれば、新都心のある地区では、軍用地接収により分散移住を強いられた元住民が、移住先で旧集落の地縁的血縁的なコミュニティ（以下旧住民コミュニティと略称）を基にした法人を設立している。法人は移住先で集落祭祀を継続するとともに接収された集落の共有地から得られる軍用地料の運用を行い、返還後は共有地に商業施設を誘致して収益をコミュニティに分配してきた。さらには、接収により破壊された聖地を再建し、移住先での村落祭祀にその地を加えることで、祭祀空間の中に元の土地との繋がりが再度組み込むという事例も散見される。

このように跡地開発は旧住民コミュニティの実践と不可分に関わりながら現在まで続いている。しかしながら開発を要因とした宗教実践とコミュニティの変化は、従来の研究において「衰退か消滅」「本土化」というような一方向の変化とみなされている。ゆえに、相互に折衝する側面が十分に捉えられていない。生きる場の変化という生者の日常生活のリアリティに添いながら、それが宗教実践と相互作用する側面を考慮する研究が必要になると考えた。

## ２．研究の目的

そこで本研究では、現代沖縄の重層的な権力構造の基で行われる軍用跡地開発をとりあげ、そこでの社会空間の再構築について、文化人類学的に探究することを目的とした。ここで言う「社会空間」とは、当該地で展開される「具体的な人々の生と社会関係が彼らの現実の行為（実践）によって築き上げられていく場」［田辺 2006］のことである。社会空間、すなわち人々の交渉や葛藤、抑圧、抵抗などの相互行為や権力作用が繰り広げられる場を考察することを通じて、現実の生活空間の形成と宗教実践の相互作用やそこに関与する人々の共同性を明らかにすることを第一の目的とした。そのためにまず、沖縄戦と軍用地接収により強制移住を経験した住民集団が、返還後の再開発において主体的に生活空間と宗教空間を再建する過程を明らかにすることを目的とした。加えて、沖縄以外の軍用跡地における社会空間の再構築についても比較考察し、ポスト基地社会の将来ビジョンについて再考することを第二の目的とした。

## ３．研究の方法

本研究は大きく、(1)現地調査（文化人類学的参与観察とインタビュー調査）と、(2)文献・理論研究に大別される。(1)現地調査は(A)沖縄県において軍用跡地開発が行われた地域（那覇市新都心地区、読谷村、沖縄市、北中城村）、(B)本土、国外において軍用跡地開発及び植民地期に開発が行われた地域の再開発に分かれる。

初年度は、那覇市新都心における軍用地化の影響について、各地区の軍用地接収前後の土地利用の変化と当該地における旧住民コミュニティの再編、旧住民コミュニティを主体とした宗教行事について調査した。二年目以降は、那覇市以外でも調査を行った。まず、那覇市同様に商業的な跡地開発を行った地域と現在も基地に隣接する地域（北中城村、沖縄市）の住民コミュニティ及び地域の資料館での聞き取り調査を行った。その結果浮かび上がってきたのが、社会空間の再構築時に活発になる過去の記憶表象をめぐる住民活動であった。この調査結果を踏まえて、三年目は、文化表象における記憶の役割、とりわけ美術館や博物館、資料館の「上」からの活動に対して、住民を中心とした記憶アーカイブといういわば「下」からの記憶保存・表象についての理論研究と、日本国内外の類似事例収集・比較分析にあたった。特に、日本による植民統治を経験した台湾に残る植民地期建築の保存・活用をめぐる現状と、ドイツにおけるホロコーストや東西冷戦をめぐる記憶のポリティクスに関する議論、および記憶展示を行うミュージアム、モニュメント、それらへの住民関与について調査を行った。

## ４．研究成果

以上の研究から明らかになったことを五点にまとめる。

### （１）土地利用の変遷：沖縄戦前、戦後

沖縄県内の主な研究対象である現在の新都心は、沖縄戦の前には四つの集落からなる純農村であった。そのうちＡ集落では沖縄戦で人口の約半分を失った。捕虜生活を経て元の集落に戻った住民を待っていたのは、米軍による土地接収と強制移住であった。1950 年代に隣接地に移り住んだ住民は離農し、軍関係の雇用や軍とは関係ない賃金労働に就くとともに、早くも旧集落の祭祀場所を隣接地に移動し、祭祀を復活させている。復活の基礎は、接収を免れた旧集落の共有地を運用したことによる賃料によって賄われ、祭祀、年金、奨学金などが拠出されることで、移住した旧住民子孫の緩やかな繋がりが形成された。

他方、軍用住宅地となった旧集落の土地は、軍によって賃料が支払われるようになった。周辺地域は、ゲートや軍用道路に接していたことから、しだいに土地の価格は高騰する。これが、返還後の商業地開発の引き金になったことが聞き取り調査から明らかになった（越智 2015「ゲート前という接触領域－沖縄県那覇市新都心における軍用地の記憶と返還地の開発－」）。

### （２）土地利用の変遷：商業開発の有効性

1972 年に沖縄は本土復帰し、軍用住宅地も米軍から返還されたが、那覇市による大規模開発は進まず、返還地は 20 年近く荒廃した状況に置かれた。旧住民コミュニティは、地域振興整備公団主導の再開発が進む中で、地元企業スーパーを誘致する独自の策をとることで、新都心として生まれ変わった土地で最初のショッピングモールの開業にこぎつけた。これに続く同地区での商業開発は、軍用地時代の何倍もの雇用を生むことから、「軍によって沖縄経済が成り立つ」という言説への有効な対抗策になった。ただし、こうした商業地開発の消費者を県内だけで賄うには限界がある。そこで注目されたのが、2000 年代以降増加している外国人観光客の存在である。日本商品を求める観光客の需要を取り込みつつ、お土産物や食事といった「商品」と言う形で沖縄文化や自然を提示することで、その消費意欲を掻き立てている（越智 2016「観光地沖縄の野心？－ポスト基地社会の消費増大にむけた開発との連関－」）。このように軍用跡地の大規模商業地開発は、ポスト基地社会の沖縄の在り方を模索する中で、ひとつのビジョンになろうとしている。開発後の旧集落の賑わいは、旧住民にとって歓迎するものである。しかし不満がないわけではない。それは祭祀における重要な場所である「聖地」の復興から明らかになる。

### （３）集落をめぐる記憶

例えば Ａ 集落では強制移住とともに聖地の祭祀対象であった拝所の香炉等を移動させたものの、移動できない泉や井戸は米軍により破壊された。他方、隣接する C 集落では、軍用地時代に埋められた泉が、返還時の現状復帰によって掘り出され、その後の旧住民らの努力によって聖地が復興した。その泉を共有する A と C は、農村時代からの隣接村特有の緊張関係が今も残る。元 A のある住民は、C の聖地復興を引き合いに出し、復帰後も聖地復興がなされなかった A のある聖地は C の泉よりも「格上」であったことから、「（碑など）なんらかの形でそれがあったということを残すべきだった」と語る。こうした過去の集落景観は、旧住民コミュニティの手によって地域誌の形で記録化がなされている。また文字や地図資料にとどまらず、旧集落のジオラマまで作成された。こうした過去の集落「復元」は、返還・再開発を経て新しく誕生した小学校に旧集落の名前を付けようという運動にまで発展した。これらの活動が意味するのは、まさに記憶の再埋め込みであり、彼らにとって自分たちの社会空間を名実ともに取り戻すことなのである。

### （４）「アメリカの記憶」の表象

旧集落の名前を取り戻した後に始まったのが、彼らにとっての「アメリカ」、すなわち沖縄戦後から復帰までの「アメリカ世」といわれる米軍統治時代の記憶アーカイブである。上記地域誌は 200 頁に渡って近世末からの地域史を丹念に記述している。しかし、戦後の項目に至ると米軍の「銃剣とブルドーザー」による強制接収に関する記述があるものの、軍統治時代の集落の様子についてはたった数行しか記載がない「隠れた記憶」だった。しかし、地域誌によって戦前の集落を「取り戻した」後、その地域誌作成を担った戦後生まれの世代が、ようやく自己を取り巻く歴史と記憶に向き合い始めたのである。2010 年代になって始まった住民コミュニティによる軍統治時代の写真収集活動は、2017 年、記録写真集として発行された。

こうした戦後と米軍統治、基地をめぐる記憶表彰は、沖縄市でも進んでいる。道路拡張によってむき出しになった商店の壁をキャンバスにして、コザ絵巻と題した 1600 平方メートルにも及ぶ壁画を住民が中心になって描いたのである。４パートからなるその絵は、琉球時代から始まっているが、２～４パートは戦後、軍によるグスクの破壊や黒人兵士の歓楽街であったという当地の「記憶」が表現されている。これは巨大な嘉手納基地に隣接する地における、独自の歴史認識であるとともに、壁画という日々多くの住民の目に触れている。さらに本土の修学旅行生を住民コミュニティで受け入れ、基地社会について

再考する機会を持つことで、記憶は外部に開かれたものになっている（越智 2017 民俗資料としてのアートー沖縄市コザ十字路絵巻と住民の協働を例にー）。

このように、時期を経て揺れ動く記憶表象は、社会空間を再構築するうえで、重要な意味を成している。

（５）社会空間の再構築と記憶のポリティクス

上記のような「下」からの記憶表象は、従来博物館や美術館が担ってきた「上」からの表象を取り込みながらも対抗する存在であると捉えることができる。2004 年に開館した沖縄県立博物館美術館では、その前身となった県立博物館時代から、「戦争遺物」「戦後の生活を支えたモノ」の展示を積極的に行っている。しかし公的な記憶表象は、常にいかなるモノを展示として見せるか見せないか、見せるのであればどう見せるのかという「管理の問題」と表裏一体である。この点を解消し、記憶表象をどのように外部に開いていくべきだろうか。この問題を考えるにあたって、台湾における日本植民地期建築の再利用、ドイツにおける第二次世界大戦から東西冷戦期の戦時遺構等の保存活用に関する調査を行い、土地建物の利用と往時の記憶の集積や表象との関わりについて考察を深めた。その結果明らかになったのが住民による戦前・戦後の記憶、とりわけ「日常の記憶」に関する表象の活発化であった。

世界的に「リビング・ヒストリー」や「個々人の記憶表彰」は、1990 年代からミュージアム等で展示の取り組みがなされてきた。そして、現在台湾やドイツでは館外、とりわけ市街地再開発の過程で商業施設にも溶け込む形で展示されることで、住民以外、特にツーリストにも開かれた存在になっている。沖縄では沖縄戦に関する資料館は多いが、軍統治期の記憶表象に関して県立博物館レベルの保存・展示を行う施設に乏しい。しかし、近年住民コミュニティが独自に資料集を編纂する活動は、広がりをみせつつある。先に述べたように、住民の中には軍用跡地開発や市街地再開発による新しい街への期待とともに、聖地を含めた過去の集落景観との違和感も存在している。こうした戦前の記憶に加えて軍統治期の記憶を何らかの形で提示することは、今の社会空間の再構築に欠かせない取り組みであると言える。今後はこのような取り組みを外部に提示していく活動を行政、住民など様様な側面から街づくりに組み込むことが、今後の沖縄においてますます求められるだろう。

〈引用文献〉

①沖縄県「第 7 章駐留軍用地の跡地利用」『沖縄の米軍基地』、163-178 頁、沖縄県、2008 年。
②田辺繋治「あとがき」西井涼子＋田辺繋治編『社会空間の人類学ーマテリアリティ・主体・モダニティ』、445-448 頁、2006 年。
③西川潤・松島泰勝「沖縄の将来像」西川潤ほか編『島嶼沖縄の内発的発展』、373-382 頁、藤原書店、2010 年。
④真喜屋美樹「米軍基地の跡地利用開発の検証」宮本憲一・川瀬光義編『沖縄論ー平和・環境・自治の島へー』、143-162 頁、岩波書店 2010 年。

（報告者の論文、学会発表は５.に掲載）

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4 件）

①越智郁乃　「墓の移動にみる現代沖縄の墓制と祖先祭祀の変化」『比較家族史研究』第 32 号、92-118 頁、2018 年、査読なし。

②越智郁乃　「すれ違いのボーダーツーリズム―沖縄台湾、国境海域の観光旅行の移り変わり―」『なじまぁ　なじみ深きアジア』7 巻、24-26 頁、2017 年、査読なし。

③越智郁乃　「第 13 章　都市の社会的包摂/排除に向き合うアートマネジメントー横浜市黄金町の事例を通じてー」大阪市立大学都市研究プラザ編『URP「先端都市研究」シリーズ８　市大都市研究の最前線ー公募型共同研究による連携講座 2015』、大阪市立大学都市研究プラザ、84-90 頁、2016 年、査読なし。

④越智郁乃　「ゲート前という接触領域ー沖縄県那覇市新都心における軍用地の記憶と返還地の開発ー」『コンタクト・ゾーン』第 7 号、京都大学人文科学研究所人文学国際研究センター、33－55 頁、2015 年、査読あり。

〔学会発表〕（計　4 件）

①越智郁乃「民俗資料としてのアートー沖縄市コザ十字路絵巻と住民の協働を例にー」日本民俗学会、第 60 回例会、2017 年。

②越智郁乃「沖縄の墓ー『継承』という名の『創造』」明治大学島嶼文化研究所設立記念フォーラム「国際社会の中の沖縄奄美」（招待講演）、2017 年。

③越智郁乃「観光地沖縄の野心？ーポスト基地社会の消費増大にむけた開発との連関ー」、文化人類学会、第 50 回研究大会、2016 年。

④越智郁乃「現代沖縄の軍用跡地における村落祭祀の『復活』ー那覇市新都心を事例に―」日本民俗学会第 67 回年会、2015 年。

〔図書〕（計　3 件）

①越智郁乃『動く墓ー沖縄都市移住者と祖先祭祀』、240 頁、森話社、2018 年。

②越智郁乃「交錯するツーリズムー八重山台湾間の観光をめぐる台湾認識のあり方―」上

水流久彦・村上和弘・西村一之編『境域の人類学　八重山・対馬にみる「越境」』、480 頁（183－223 頁）、2017 年。
③越智郁乃「海を越える墓－現代沖縄の『墓の移動』をめぐる語りと情緒」、小熊誠編、『＜境界＞を越える沖縄－人・文化・民俗－』、森話社、312 頁（181-226 頁）、2016 年。

〔その他〕
ホームページ等
立教大学研究者情報　越智郁乃
http://univdb.rikkyo.ac.jp/view?l=ja&u=100001545&n=%E8%B6%8A%E6%99%BA&sm=name&sl=ja&sp=1

６．研究組織
(1)研究代表者
越智　郁乃（OCHI , Ikuno）
立教大学・観光学部・助教
研究者番号：１０６２４２１５